『磔のロシア　スターリンと芸術家たち』

亀山郁夫著

岩波書店

動物のなかで大量虐殺をするのはホモ・サピエンスだけだとある霊長類研究者が書いていたが、大粛正という人類史上最悪のジェノザイドを敢行し、「個人の死は不幸だが、複数の死は統計学的なものだ」と云ってのけたというスターリン。ロシア・アヴァンギャルドのなかでも最も天才的かつ最も難解な詩人フレーブニコフの評伝をひっさげて論壇に華々しいデヴューを飾った亀山郁夫は、それから一四年を経て、今度は近代史のアポリアともいうべきこの大「悪人」の復権（？）をめざすのである。それは自らの存在を問われ兼ねない危険な賭けであったにちがいない。しかし逡巡することなくこの賭に挑んだ著者の勇気にはまず脱帽せざるをえない。アヴァンギャルドが社会主義リアリズムを準備し、全体主義圏力と結びつかざるをえなかったという、逆説的な構造を亀山は確かな手応えをもって掴みえたという確信があったのであろう。

しかしこの一書だけで亀山のスターリン研究を判断してはならない。この数年来著者は『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房）、『驚くべきショスタコーヴィチ』（筑摩書房）、『スターリンという神話』（岩波書店）、『全体芸術様式スターリン』（現代思潮新社）とたてつづけにスターリン時代にまつわる著訳者を世に問うてきた。本書はこうした仕事のなかで著者が獲得していった独自の視点を総動員して書かれたものであり、なかでもグロイスの著書『全体主義芸術スターリン』はソビエト時代の芸術家の権力志向性と独裁権力との共生という卓抜な論点を提供しており、当然にも本書の下敷きとなっていることをまず押さえておこう。

これまでのスターリン主義研究では、芸術家はつねに独裁権力の犠牲者と位置づけられ芸術家の側からの権力への働きかけはおうおうにして看過ないし過小評価されてきた。それほどまでに反スターリニズムが自明のものとして現代人の意識にすりこまれてきたのである。こうした自明性、図式化に、亀山は「二枚舌」という彼ならではの分析手段をもって切り込んでいく。かつてソルジェニーツィンは「嘘によらず生きよ！」と訴えたが、それはスターリン批判後になってはじめて出てくる強者の論理であり、そのヒロイズムにばかり目がいくと、嘘をつかざるをえなかった芸術家たちの創造行為の真相は見えてこない。いな、嘘と二枚舌は似て非なるものだと、亀山は断ずる。「「二枚舌」のもつ強さは何よりも、批判する対象への愛の強さにある」とされるのだ。

本書ではテロルの恐怖に怯えながらも、この二枚舌をテクストに仕掛けとして埋め込むことで創造行為をつづけながら、生き長らえた者（ブルガーコフ、ショスタコーヴィチ、エイゼンシュテイン）、独裁者への頌詩を書きながら獄

死したもの（マンデリシターム）、革命詩人に祭り上げられながらも、自殺へと追い込まれた者（マヤコフスキー）、筋金入のプロレタリア作家として作歌同盟を結成、スターリン体制の確立に手を貸しながら後に謎の死（著者は謀殺説をとる）をとげたゴーリキー、以上六人の芸術家がとりあげられる。こうした秘められた歴史の復元作業は、容易ではない。いかに芸術的直観力があっても、ペレストロイカ以後の情報公開がなかったらとても踏み込める領域ではない。著者はこの一〇年ほどのあいだに公刊された膨大な文献資料を解読し、サスペンスを思わせるような想像力を駆使して、ソビエトを代表する芸術家たちの内面の葛藤と独裁者との切り結びを読者に現前させる。ともすると強引ともとれる主観点論理化を得意とする亀山だが、本書ではその点は抑制がきいており、あくまでも事実に語らせるという姿勢を崩していない。六人もの芸術家を扱いながら、叙述がワンパターンにならず、各人の個性が浮き彫りにされているのはこのためだ。

詩人のヨシフ・ブロツキーは、マンデリシタームの「スターリンをめぐる詩は天才的だ」と評したそうだが、それこそ二枚舌をもってはじめて露出されてくる存在の二重性という事実を云いえている。芸術家は二枚舌という否定媒介的契機によってより高次の創造の秘儀に触れることができるのである。これこそが亀山がしばしば口にするエクスタシーということか。あとがきで音楽と映画をもっとも不得手な領域と書いているが、音楽評論をてがけ、自らもすぐれた演奏家である亀山がこう言うと「これこそ二枚舌ではないのか」と思わず叫びたくなるのは私だけではあるまい。事実ショスタコーヴィチの章がもっとも立体的でスリルに富んでいるのは彼の音楽的感性に裏打ちされているからであろう。

おそらくスターリン時代の芸術状況をめぐっては、本国ロシアでこれからも新しい研究が相次ぐものと予想される。著者にはこれでスターリンとおさらばするのではなく、自身あとがきで触れているように、パステルナークやアフマートワをも視野に入れたその時代の芸術の内面史を再構築して欲しい。それこそがテロルで散った者たちへのレクイエムとなるはずだから。（ちなみに本書は二〇〇二年度の大佛次郎賞を受賞している。）

（渡辺雅司）